

戸田徹と第三世界革命論



笠井潔（黒木龍思）

1968年和光大学入学（中退） 68年プロレタリア学生同盟加盟 69年「階級形成論の方法論的諸前提」（笠井潔/黒木龍思・『拠点』第一号）69年「戦術＝階級形成論の一視点」（黒木龍思・『情況』）71年共労党赤色戦線派 72・73年「日本革命思想の転生」（上・中・下）（黒木龍思・『情況』）

79年「バイバイ・エンジェル」（第6回角川小説賞）84年「テロルの現象学：観念批判論序説」03年「オイディプス症候群」（第3回本格ミステリ大賞）

—初出 戸田徹遺稿集 「彼方へ 一霊の解放と革命の夢」、1985年3月20日発行 戸田徹遺稿集編纂委員会 —

戸田徹との集中的な共同の理論作業は、私の場合この15年ほどで、前後2回にわたっている。最初は

1970年から3年間ほどの時期で、第三世界革命論と人民権力闘争論がその主要なテーマだった。そして2回目は、1980年から本年（1984年）戸田が急逝するまでの最近4年間ほどであり、中心的なテーマはいうまでもなくマルクス主義批判であり、あるいは秘教的革命論の模索であった。

1969年、関西で戸田徹は、67年の10・8羽田闘争以降の大衆叛乱の現実性に一挙に追いつこうと、政治組織（共産主義労働者党）および学生組織（民主主義学生同盟）の組織分裂と引きかえに決戦体制を築くべく、指導的な場所で奮闘したという。その結果としてのみ、69年秋期決戦のひとつの頂点をなす11・13の大阪扇町戦闘も実現されえたのだといえる。戸田が党中央のスタッフとして上京してきたのは、この闘争で逮捕され拘置生活を送ったあとのことだった。1970年夏のことである。そして上京したその時には既に、獄中で練りあげた第三世界革命論の腹案を戸田は、密かに携えていた。

その頃党の全体は、1969年秋期決戦の「決死の飛躍」に疲れはてて、もっぱら右翼的・召還主義的な雰囲気の色濃く染めあげられていた。そしてこの時期に提起されたのが、戸田の第三世界革命論だったのである。党内の右翼的・召還主義的潮流は、先進国革命主義・労働者本体論の立場をとっていたのだから、この潮流を組織的・理論的・人格的に代表していた書記長白川真澄の世界危機論と、議長いいた・ももの岩田弘的な世界危機論の折衷である党第3回大会「現代世界革命」論に対する全面批判ともいうべき第三世界革命論の登場は、党内にもうひとつの潮流を準備する、その最初の画期をなすべきものであった。

戸田徹の第三世界論は、党内で入管闘争、沖繩闘争、そして三里塚闘争という1970年、71年の闘争過程を実質的に領導するものとなった。そして60年代のラディカリズムにとって

最後のチャンスである71年の三里塚・沖縄決戦が到来した。9・16三里塚東峰戦闘に向けて鋭角的かつ全面的な闘争体制を築いていくためには、書記長白川を先頭に右翼的厭戦気分が骨がらみになっていた党内主流派を相手に、半年以上にわたる激しい党内闘争が要求されたのである。三里塚現闘の責任者であった戸田にとって、それは、「飛躍」のための闘争という点で、69年の経験を再現するものだったに違いない。

9月三里塚闘争は完遂されたが、11月沖縄闘争は右翼的潮流の妨害によって不発におわらざるをえなかった。そしてこの問題をめぐり、共産主義労働者党は、右、左、中間の三派に分裂することになる。

戸田徹と初めて会ったのは、69年秋期決戦の直前、法政大学のバリケードのなかでおこなわれた学生細胞会議の席上のことだった。たまたま大阪から上京していた戸田は、オブザーバーということで出席していたのだろう。優しい顔立ちなのに、なにか思いつめたような眉のあいだに縦皺を刻んでいたその表情が、印象的だった。

戸田と本格的につきあうようになったのは、上京後の1970年夏からのことだった。私が学生組織(プロレタリア学生同盟)の指導部で、戸田が学対責任者という組織的關係もあって、下北沢にあった戸田のアパートにはよく泊まり込んだものだ。1971年になり、戸田が三里塚現闘の責任者になった後では、党内闘争上の左派フラクションにおける關係が重要になった。その時にはもう、学生組織をめぐる指導問題ではなく、党内闘争をめぐる意志統一の方が戸田との議論の中心になっていた。

三分裂以降1972年いっぱい、ほぼ一年間、戸田と私は左派共労党の中心メンバーというような格好で組織の再建に取りくむことになった。しかし私たちには、小規模な新左翼セクトとしての自己保存だけを問題にするような観念が、既に底のところで解体してしまっていたのだろう。連合赤軍事件の経験が、党派観念の自己増殖を拒むように作用したのかもしれない。戸田とはほとんど連日のように一緒に過ごしたその一年間だが、徒労に似た作業だと思いがあって、重苦しい記憶だけが残り、その後楽しく語りあえたような思い出もほとんどない。第三世界革命論と人民権力闘争をめぐる共同の理論作業は、この時期にほとんど完成されたのだったが、理論的完成など空しいものだ。戸田との共同理論作業のガイストは、時間もなく荒削りのままだったにせよ、あくまで1969年秋期決戦から1971年秋期決戦に至る二年間の対権力と対党内の一箇二重の闘争を共同で戦い抜いたあの時期にこそ、真に形成されたのだと今は思う。

その後しばらくして、私たちの党派は党的団結の自己解除を決定し、私はそれを機に、元共労党左派ということになる政治グループから離れた。1978年頃からふたたび親しくつきあうようになるまで、二人は各々別々に、独自の理論作業を続けていたことになる。私は『テロルの現象学』に結実するテロリズム批判論を書き進めることによってマルクス主義への批判を意識化していったのだが、その時期戸田は、「中国継続革命と過渡期的社会」や『労働者革命論』の逆説を超えて」を書いていたということになる。

マルクス主義をその理論的総体性においてどう評価すべきかという問題については、いったん棚にあげたまま、ひたすら連合赤軍事件における解放の虐殺への転化、革命のテロリズムへの転化というアポリアにのみ思考を集中していた私とは違って、戸田はこの時期、マ

ルクス主義の再生は可能なのか、それとも不可能なのかという難問により体系的に立ち向かってきたように思われる。そして、私の作業がテロリズム論を突き抜けてマルクス主義への総体的批判に到達したのと、戸田の執拗な理論作業がついにマルクス主義からの訣別という結論に到達したのは、1979年頃、ほぼ同じ時期のことであった。そしてそれはまた、約十年前の私たちが全身全霊をあげてそこに「合流」しようと努めたインドシナの革命が、あるいはヴェトナムのポート・ピープル問題において、あるいはカンボジアの大虐殺において、あるいは中国とヴェトナム、ヴェトナムとカンボジアの社会主義国家間闘争において、無惨な自壊と荒廃を疑う余地なく露呈しおえた時期でもあった。私たちは、十年前の自身の判断と態度の公的な、仮借ない自己批判の思いを込めて、公然とマルクス主義への批判を開始しなければならないと決意したのである。

戸田徹のすべてを語りつくすことなど、到底できはしないことだ。さいわいこの遺稿集のため、大阪時代については永峰幸三郎氏が、マルクス批判論については小坂修平氏が文章を用意してくれることになっている。であればここで、私は、戸田との最初の共同理論作業でもあった第三世界革命論の今日における意味について、多少とも考えてみたいと思う。戸田のマルクス主義批判や秘教的革命論については、今後もなんらかの形で触れる機会があるかもしれない。しかし第三世界革命論については、他に書くような機会が訪れるとは思えないからでもある。そして、第三世界革命論や人民権力闘争論のなかに、実はマルクス主義批判も秘教的革命論も確かに萌芽していたのだということさえ示すことができるのならば、本稿にも多少の意義が認められるのではないかと考えるのである。

戸田徹による第三世界革命論の最初のまとまっの提起は、「第三世界解放革命と『現代世界革命』」(以下「第三世界」論文と略)である。この論文で戸田は、共産主義労働者党第三回大会(1969年)の「現代世界革命」論を執拗に批判している。

いいだ・もも、白川真澄の理論的主導下に提出された「現代世界革命」論は、いわゆる「宣言・声明」派(「平和共存」派)の世界認識、国際情勢認識では69年秋期決戦を闘いえないという現実的必要性に迫られて泥縄式に構想されたものであった。簡単にいえば、情勢の急迫がソフト・スターリニズム的世界認識からトロツキズム的世界認識へと、この党派を一挙に押しやったのだともいえる。

1970年代後半の時代、日本の新左翼的世界でトロツキズム的世界論は、岩田弘の「世界資本主義論」(マル戦派)、それに対抗する形で提出された塩見孝也(一向健)の「過渡期世界論」(関西ブントー赤軍派)が代表的なものとして流通していたといえるだろう。革共同系(特に革マル派)の「反帝・反スタ」論は、逆説的ながらスターリン的な全般的危機論と論理的には照応し、いわば「世界危機—世界革命」を呼号するための理論装置として機能すべきトロツキズム的世界論とは異質なものであった。

つまり「第三世界」論文で戸田徹が撃ったのは、擬似トロツキズム的ないいだ=白川「現代世界革命論」であっただけでなく、その背後に影を落としている岩田「世界資本主義論」や一向「過渡期世界論」など、新左翼に根強い「世界危機—世界革命」論、そしてトロツキズム的世界論=戦略論という構図そのものでもあったのだ。「第三世界」論文は、「今日『先進国』プロレタリアートが普遍的階級に自己形成するのは第三世界解放革命闘争への合流をかちと

り、そのことを通じて帝国主義的国民としての自己の定在を解体することによって帝国主義打倒の共同の戦列を構成しうること、今日のマルクス主義者は第三世界解放革命の意義をその世界史的根拠にまでさかのぼってとらえかえすという困難な理論課題を自らに課すこと抜きにその歴史的任務の完遂はありえないことを、かさねて強調しておかなければならない」という結語で終わっている。そして、ここで提起されている第一の課題の実践こそ、戸田にとっては1971年の三里塚闘争であり、そこで練りあげられた人民権力闘争論であった。

だがここでは、人民権力闘争論ではなく、「第三世界解放革命の意義をその世界史的根拠にまでさかのぼってとらえかえす」べき第二の課題が、どのように理論的に展開されていったかについて、簡単に見ていきたい。

戸田徹の第三世界革命論は、1970年の「第三世界」論文に次いで、1977年の「君知るや南の国—第三世界考」(以下「南の国」論文と略)でほぼ全体的な整理・総括がおこなわれている。しかし「南の国」論文は、記述の体系性や文体の簡明さといった点で、「第三世界」論文のモチーフを結実させたものとはいえ、完成度の高さとはいえ、そこにはどこかしら「ミネルヴァの梟は黄昏に飛びたつ」というヘーゲルの警句を思い起こさせるようなところがある。というのは、戸田の第三世界革命論の実践的背景であった中国文化大革命は、その前年の「四人組」事件によって最終的な清算過程に入り、あるいは勝利したヴェトナム—インドシナ革命もまた、1978、9年に全面的に暴露されるであろうその惨状を、徐々に露呈しつつあったからである。

「南の国」論文で提出されている理論内容は、1972年の時点でほぼ完成されていた。1972年に私が書いた「『近代世界』の基礎構造と『第三世界解放革命—世界共産主義』」(『情況』誌、八月号、十月号)で、「南の国」論文の論点は、荒削りながら既に提出されている。この論文の執筆者は私であるが、内容のほとんどは戸田との討議を踏まえたものであり、とりわけ理論的フレームにあたる中心部分は全面的に戸田の提言によっている。私自身がつけ加えたのは、大塚経済史学批判による近代世界の形成史に関する部分、つまりその歴史的部分に過ぎず、その理論的部分——第三世界革命という「現実」を『資本論』体系の内部に正当に位置づけることにより、『資本論』体系自体を市民社会批判の学から近代世界批判の学へと再編、再生させるという構想——は、すべて戸田の理論的思索に由来したものであった。

1972年の時点でこのように、既にほぼ完成されていた構想が、五年後の77年になってようやく執筆・公表されえたという事情に背景には、かなり重要な問題が含まれているような気がする。そこにはおそらく、「マルクス」から「反マルクス」への、戸田の鋭角的な推転の謎が秘められているのだ。

連合赤軍事件の後、自身の新左翼的エートスが根底から崩壊するという経験のなかで、私には、戸田とともに作りあげてしまった第三世界革命論(「近代世界批判」体系)をどう仕末していいものか、ほとんど困惑してしまったという経験がある。その理論的正当性はなお疑いえないのに、打ち破らなければならない壁を前にして、その理論は完全に無力だったのだ。ほんとうはその時、「正しい理論」という発想そのものが疑われるべきであったのだが、そのことが判明に了解されるようになるまでには、なおその後十年に近い年月が必要だった。

だが今ならば、私にとっての、そしておそらく戸田にとっての第三世界革命論の意味も、お

およそ次のように捉え返すことができる。

現実的な世界喪失という「受苦」あるいは「不幸」の感受が、人を観念的な自己回復の道に押しやっていく。あるいは、人間を定義するものは私と世界とのあいだにある根源的なズレなのだが、この定義そのものによって人間は、ズレの解消を、つまり私と世界の特権的一体化への不可能な欲望を不断に挑発されるべき存在でもある。

こうして、世界への観念的欲望という問題が生じる。この欲望は人間存在にとって不可避のものであるが故に、その処理を誤れば個人の人格は、したがって人間社会は土台から崩壊するであろう。だから社会は、私と世界とのズレを埋めるべき共同観念の体系を流布せざるをえない。あるいは、私と世界との実存論的なズレを、擬似的に解消しうる共同観念だけが、市民社会の普遍的な観念のシステムとなる。

戸田徹が育った戦後日本という環境に即していえば、その社会の普遍的な観念のシステムは「戦後民主主義」と呼ばれるものであった。敗戦という廃墟の光景は、物質的な意味でも精神的な意味でも、人間存在に普遍的な私と世界とのズレという問題を、どんな保護膜もなく裸形に露出させるものであったろう。

戦後期の「革新勢力」のスローガンが「平和と民主主義、よりよき国民生活」であったのは象徴的である。戦災の復興から高度経済成長に向かう戦後国民運動は、一方で飢餓や貧困という体験によって、他方で倫理的なアイデンティティの喪失によって二重に強いられた敗戦時における私と世界との鋭角的なズレという問題を、そしてその「受苦」あるいは「不幸」を、社共・総評に中心的に担われた戦後民主主義のイデオロギーによって擬似的に解消するものに他ならなかった。戸田徹の学士論文「現代資本主義と民主主義」は、革命や社会主義という問題をも、この戦後日本の共同観念(戦後民主主義)の圏内で理解しようとするモチーフに貫かれている。

だが、私と世界とのズレを共同観念によって解消するという作為は、その解消が根本的に擬似的なものでしかないということによって、世界に第二、そして第三の観念形態を導かざるをえない。共同観念に対して、それを「自己観念—党派観念」という言葉で呼ぶことにしよう。

共同観念は、それへの背反・脱落・敵対として不可避に自己観念を産出すべきものだが、戦後過程における政治的観念の世界でそれは、戦後民主主義の国民運動ならびに正統派共産主義(コミンテルン・マルクス主義)の戦後的・「先進国」的形態であるソフト・スターリニズム(「平和共存」と「反独占民主主義」)に対して、1960年安保闘争を結節点に革共同系・ブント系の左翼反対派敵潮流を発生させるという形で現実化したのである。

自己観念の本質は、飽くことない世界憎悪である。そしてこの世界憎悪は、必然的にラディカルな倫理主義へと理念化されていく。疎外された倫理が自己観念の感性的基礎である世界憎悪を喰いつくしてしまう時、つまり自己観念がその観念運動の果てに自壊へと至る時、そこに党派観念が析出される。

戦後の「平和と民主主義、よりよき国民生活」をめぐる共同観念は、1950年代を通じて成熟していくことにより逆に、そのような私と世界のズレの擬似的解消から決定的に逸脱していくべき時代的な観念を呼びおこしつつあったのだ。こうした逸脱を風俗の極で析出すれば「太陽族」ということになるし、政治の極で析出すれば「安保ブント」ということになる。吉本隆明が

「戦後世代の政治思想」で、太陽族作家の石原慎太郎と安保ブントの学生イデオログ姫岡玲治を同時にとりあげたのには、相応の根拠があったと考えるべきなのである。

1960年代の高度経済成長は、50年代からのこうした傾向性をいっそう加速し、前面化するものであった。伝統的な戦後民主主義において、生活の再建(春闘に代表される経済闘争)は、あくまでも価値の再建(平和と民主主義のための政治闘争)と一対になっていたのだが、60年代を通じてこの構図は急速に崩壊していく。60年安保を最後に、戦後政治闘争の国民運動的基盤は急速に空洞化し、春闘は高度成長の分け前をめぐる階級的エゴイズムを貫徹するだけの「ゼニ取り、モノ取り」闘争に頹落していったのだ。

戦後日本市民社会という場所における私と世界とのズレの、戦後民主主義という共同観念的解消が破綻していることを劇的に露呈させたのは、いうまでもなくベトナム戦争という時代的体験であった。北爆開始を画期とするベトナム戦争の激化をフィルターとして、戦後民主主義の虚偽は完膚なきまでに暴露されてしまったのである。その「平和と民主主義」は、第三世界がどのような戦禍の渦のなかであろうと、帝国主義本国日本の戦後市民社会さえ安泰ならば気に病むことなどないという「城内平和」の理念に他ならず、その「よりよき国民生活」は、新植民地主義的収奪の上にもみ可能な限界なき経済的膨張の理念に他ならないという実像の暴露……。

ベトナム反戦闘争から70年安保闘争に向かう過程で、戦闘的な学生や青年労働者が戦後民主主義的な共同観念から決定的に逸脱し、左翼反対派的な自己観念—党派観念の方向に吸引されていったのには、このような時代的背景があったのである。そして、七〇年安保闘争を闘うために「平和共存」論から「現代世界革命」論へ、ソフト・スターリニズム的世界認識からトロツキズム的世界認識へ移行した共産主義労働者党第3回大会の新局面もまた、同じ背景のもとで理解される必要がある。

この大会の路線を、文字通り最先頭で実現したのが戸田徹であった。この「決死の飛躍」の体験は、機動隊との街頭戦により隊列のなかから死者を出した11・13大阪扇町戦闘において、他ならぬ戸田自身が最高指導者としてそれを準備し、指導し、そして自ら逮捕されるという経過のなかに刻印されている。戸田による扇町闘争裁判の冒頭陳述には、この「決死の飛躍」にまつわる、いいえぬ思いが溢れているというべきではないだろうか。

だが戸田徹は、戦後民主主義的左翼(共同観念)から、左翼反対派(自己観念—党派観念)への「転向」には、ついにとどまりえなかったのだ。戸田による第三世界革命論の提起は、このことを示すもの以外ではない。そしてまた、ここにこそ第三世界革命論の未完結という事態の謎も読みとられるべきなのである。

小指一本動かすにも位置づけが必要であり、そのためにはまず世界情勢分析から始めなければならないという新左翼的な発想は、最終的に赤軍派の「世界党—世界赤軍」路線という左翼主義的空論にまで極限化したのだったが、コミンテルン・マルクス主義に出自をもつ左翼反対派の発想は基本的にこの赤軍派的な世界観念と構造的に同型である。つまりそれは、共同観念から脱落し、共同観念に敵対する自己観念の、無限に肥大化していく世界への欲望の象徴に他ならないのである。

戸田徹の第三世界革命論は、その原点において、戦後民主主義的な共同観念にはもちろ

んのこと、左翼反対派的な自己観念にも回収されえない質のものであった。そこには、トロツキズム的な世界論＝戦略論の批判によって世界という観念、世界という欲望の病理をそのものとして送り出すべき視点が準備されていたのだともいえる。

むしろ、こういった方がよい。第三世界革命論の発想の核にあったものは、戸田徹による<外部>の発見だったのだと。人間は、世界とのズレを埋めるために観念を疎外し、果てなく累積せざるをえないのだが、しかし観念は、その自己累積の果てに、ある絶対的な限界の地平に到達せざるをえない。<外部>とは、つまり観念の自己限界の意識としてのみ体験されるのであり、これを概念的に定立して知的に所有したり操作したりすることはできない。

だから<外部>の発見は、あらゆる宗教的感情の底にあるものを共有することにもなる。つまりそれは、達しえないものへの敬虔の念であり、あるいは祈りでもある。

戦後民主主義からトロツキズム的世界論＝戦略論への移行と、その実践としての69年秋期決戦、とりわけ11・13扇町戦闘、そして糟谷孝幸の死。そこで戸田が体験しなければならなかったのは、死という問題をめぐって露呈された観念の<外部>ではなかったろうか。その欠損ゆえに、世界を観念的に私所有しなければならないトロツキズム的・左翼反対派的欲望は、その自己限界の意識である観念の<外部>に直面し、必然的に解体した。戸田の第三世界とは、この自己解体的体験の象徴に他ならなかったのだと、今ならばいうこともできる。

そこにはいわば、ランボーのアフリカ、T. E. ロレンスのアラビア、そしてマルローの中国といった問題にも似たものがあつた。ニーチェが批難したニヒリズムやルサンチマンとは、存在の欠損(私と世界とのズレ)を意味や観念によって埋めようとする弱い精神の現われだったのだが、これらの能動的ニヒリストたちは、観念の外部に、私と世界のあいだに口を開くろぐろとした深淵に、自己解体的に直面してしまったのである。

戸田徹の第三世界は、あくまでも、東峰戦闘を頂点とする70年、71年の三里塚・沖縄闘争の渦中において生きられたのであり、「南の国」論文における近代世界批判の体系的提出には、いささか「ミネルヴァの梟」の趣きがあると先に書いたのは、こうした観点からなのである。いってみれば、観念的に隠蔽されない<外部>への直面が、私と世界とのズレが、時代的に聖なる暴力の沸騰を呼ぶのだ。あの時期の私たちは、たしかに象徴的暴力のただなかを生きていた。

戸田の近代世界批判体系は、象徴的暴力の現実性が時代から喪われていく事態によって強いられた、いわば、『資本論』体系のなかに<ズレ>(つまり<反復>と<差異>)を読みこもうとすること、等々の作業であったともいえる。ということは、つまり、流行のポスト構造主義的マルクス解釈や『資本論』解釈など、日本では十年以上も前に戸田徹によって試みられたものに過ぎないのだともいえる。そしてまた、体系のなかに<差異>を発見するという作業によって、マルクス主義に不可避に転化していくマルクスを救うことはできないという結論に到達した時、ついに戸田やマルクスとの訣別の道を選んだのだった。

晩年の戸田が、秘教的革命論を模索していたということについては、既に述べた。<外部>への自己無化的な自己開示こそが、秘教的なるものの核心にある。そしてそれは、あらゆる革命的なるものの源泉でもある。だが、その早過ぎる死によって戸田自身が私たちにとっての<外部>となってしまった今、秘教的革命論の模索は、残された私たちの課題となって残

されているというべきである。